# 講義ノートで再発見！

関守邦子

校正の仕事をして十年にもなる仕事仲間のひとりが、突然日本エディタースクールに通い始めました。「ちゃんと勉強したい」とのこと。経験者ということで実習クラスから受講することにしたらしいのですが、経験が邪魔をして先生に注意されることが多く、やや自信喪失気味のようです。そこで、十年ほど前に私が基本クラスを受講したときの講義ノートが役立てばと引っ張り出してみました。

そこには、「ポ」という最近では見かけなくなった文字と、講義中に書き留めた先生の言葉のいくつかがありました。それまで、出版とはまったく関係のない仕事をしていた私には、新鮮な言葉だったのでしょう。その中の二つほどについて、書いてみたいと思います。

一つめは「機械になる」です。私はいま、雑誌（情報誌）の校正が仕事の中心です。出版社に出向き、編集部と直接ゲラのやりとりをしています。前述の仕事仲間も同じ職場です。雑誌といえども、ちゃんと原稿引き合わせも素読みもあるので、その点では〝機械にな〟っています。ただ、せっかくの情報誌であるにもかかわらず、さっぱり内容を覚えていなく実生活にまったく役に立たないのは、悔しい気もしますが……。

さて、校正は随時五、六人でしているので、初校再校ともに同じゲラを必ず二人で見ています。二度目に見るときは、素読みだけをするのですが、このときは〝機械〟ではなく〝読者〟になるようにしています。ターゲットとしている年代に理解される言葉か、わかりやすい言い回しか、死語は使っていないかなど。情報は、だれが読んでもわからなければ意味がありません。内容が料理のときは、頭の中で料理を作り、ダイエット体操のときは体操をし、お店や商品の紹介のときは知りたいことがデータとして記載されているかどうかを確認します。〝機械〟ではいられないのです。

ただ、機械になりかけることもあります。前に書いたように、編集部と直接ゲラのやりとりをしていると、大量のゲラが一度に出校され、どれも急ぎで返さなければならなくなることがあります。そうなると、目の前にあるゲラの山を片付けるべく人間の心を失いかけてしまいます。そんなときは軽い雑談をしたり、たち歩くなどして気分を変えます。そして、自分が機械になりかけていた時間に、ほかの人が機械になっていなかったことを祈ることになります。

次に目に留まったのは、「写植の校正は書体の違いを見極めること」です。いまや写植という言葉もなかなか聞かなくなりましたが、少し前までは、書体にはけっこう苦しんだ覚えがあります。レイアウト用紙にぎっしりと書かれた、数字からリード、見出し、本文、キャプションにいたるまでの書体指定。使用される書体はほぼ決まっているものの、微妙な太さの違いを見極められるようになるまで、かなりの時間がかかったように思います。いまでさえ完璧である自信は、まったくありません。とはいえ、講義では目にすることのなかったいろいろな書体が本当にたくさんあることに感心し、それを決めるデザイナーや編集者の方々を尊敬したものです。現在では、書体の確認をすることはなくなりましたが、よい経験だったと思います。

最後に、講義ノートを見て驚いたことをひとつ。雑誌の校正をしていて、初めて聞く言葉がいくつかありました。たとえば〝裁ち切り〟や色校正のときのC（シアン）、M（マゼンタ）、Y（イエロー）などです。しかし、なんと今回、「出版の基本知識」の講義ノートの中にこれらの言葉を発見しました。知っているはずだったんですね。講義ノートをお持ちの方は、ちょっと開いてみてください。新鮮な驚きがあるかもしれません！